民主島根
2022年
11.20
第1416号
発行所　松江市袖師町３－６　TEL 0852－24－2444
日本共産党島根県委員会　FAX　0852－24－6369

# 国政と一体に地方政治の要求運動を大いに

## 「強く大きな党」づくりでこそ不屈性発揮を

### 党島根県委　全県地方議員会議開く

日本共産党島根県委員会は11日、大田市で全県地方議員会議を開きました。地方議員や機関役員ら22人が出席し、全国都道府県委員長会議（3日）や全国地方議員・候補者会議（5日）を踏まえた「特別期間」の目標総達成に向けての活動等を交流しました。

上代善雄県委員長は、県内でも統一協会問題や暮らしと経済の立て直しなど「政治を変えたい」という要求が渦巻いていると指摘。「住民の身近なところで党の真価を発揮してきた地方議員が、住民の願いを一つに集め、岸田内閣を打倒しよう」と訴え、目標達成に向けて記念講演と6中総決定を推進の力にし、支部とともに思い切って広く入党を呼びかけ、民青同盟の大奮闘を実らせるためにみんなで力を合わせようと呼びかけました。

尾村利成、大国陽介両県議が県議会決算特別委員会等で要求した医療や介護、雇用、農業など各分野における県内自治体の制度や施策状況を報告しました。参加者は「日常から住民要求を聞き、要求とかみ合った集いを開催したい」「支部で記念講演を学習中。党員の成長につなげたい」などの決意が語られました。

党活動や議会活動などを交流する参加者（大田市）

## 入居者ニーズつかみ改善を

### 尾村県議が比津が丘団地入居者と懇談

日本共産党の尾村利成県議は10日、県営住宅比津が丘団地を訪れ、住環境改善について高層自治会の会長や福祉推進委員、丘頂自治会の民生委員、水道運営委員ら7人の役員と懇談しました。

県建築住宅課の佐伯和夫課長、岩崎健児統括グループリーダー、県住宅供給公社の大國博史常務理事、松江住宅管理事務所の内田浩所長らが同席しました。

自治会役員らは、高齢者・ひとり親世帯が多く、共有スペースの電気代（年間216万円）や蛍光灯代（約14万円）が負担となっており、高所の電灯交換作業も大変な実態を報告。その上で「公社においてLED化や高所交換をお願いしたい」などと要望。また、外国人入居者への対応の支援等も求めました。

県建築住宅課の佐伯課長は「（入居者と公社の橋渡し役の）連絡員の方に正しい認識を持ってもらい、今後の対応を考えていきたい」と説明。

県住宅供給公社の大國常務理事は「入居者のみなさんが生活される上で危険や支障があってはなりません。高所作業は公社が行います」と答えました。

県営比津が丘団地役員のみなさんとの意見交換会（松江市）

## 青年の要求にこたえられる大きな民青を

### 民青県委　出雲市内で県代表者会議

民青同盟島根県委員会は13日、出雲市内で代表者会議を開き、食料支援の取り組みや仲間増やしの目標達成に挑戦してきた経験を交流し、25日から始まる第46回全国大会に参加する代議員を選出しました。

討論では「この2年間、食料支援に取り組んできた。最近は物価高騰の影響を受けているという学生も多かった。高すぎる学費の問題も変わっていない。引き続き取り組んでいきたい」「給料が上がらない中での物価高騰は若い労働者にとっても影響が大きい」「班会で新聞を一緒に読んだり、色々な人の話を聞いたりすると勉強になる。友達を気軽に誘えるような楽しい班会をつくりたい」などの発言がありました。

討論のまとめを行った田中あつ子（仮名）県委員長は「同盟員自身が活動する意義を感じることが新しい仲間を迎えることにつながる。食料支援活動の継続などと同時に、班会の開催にも努力を続け、青年の要求にこたえ展望を届けられる大きな民青をつくろう」と呼びかけました。

日本共産党演説会
12月18日（日）
■10:00～
松江テルサホール
■14:00～
出雲ロイヤルホテル
平安の間
弁士
党書記局長(参院議員)
小池 晃

私たちもお話します

【松江会場】
県議会議員
尾村としなり

【出雲会場】
県議会議員
大国陽介

## 鼓動

立冬も過ぎ、店頭の特設コーナーには多くの手帳が並ぶようになった。時の流れの速さを実感すると同時に、新しい年に向けての期待が湧いてくる時期でもある。スマホ等のデジタルツールに、手帳の機能を代替する人が多い現代ではあるが、紙製手帳の人気は根強く、存在感が増しているのは間違いない▼「手帳」と聞いて思い浮かぶ体裁のものが日本に持ち込まれたのは、明治維新前後。福沢諭吉がパリから持ち帰った手帳が原型だ。その後、明治期に旧大蔵省が発行した「懐中日記」以来、国内では様々に開発がなされ、多機能手帳が流布した。手帳の進化は、まさに日本の近代化と共にあったといえる▼そして今、デジタル化の進む傍らで、それぞれのライフスタイルに合わせた仕様と、こだわりのデザインを求める手帳愛好家は増え続け、今や手帳の年間出荷数は一億冊にのぼると聞く▼試しにネットで「手帳」と検索すると、幅広い価格帯を持つ商品としての情報だけでなく、多くの愛好家による活用術の発信にも出会う。同じ仕様の手帳でありながら、使い手が何に重きを置いて生きているかで、手帳自体が異なる成長を遂げる事例には驚かされる。こうして、自身の価値観や生き方まで反映する手帳は、使い手自身の鏡となり相棒となっていく。手帳の数だけ人生がある▼手帳好きを自認する筆者自身も、すでに新しい相棒選びに余念がない。そして、その過程自体が、自らと向き合い、内省を促す時間になっていることにも気づかされている。何を軸に生きるのか―、目の前の小さな手帳が、静かに問いかけてくる。（江）